
ババがメッセージを伝える方法に関する御言葉

皆さんの信仰心に付け込んでいる連中がいます。彼らは、私が「乗り移って」、霊媒師やら、かまど（！）やら、何やらを介して「話している」と宣伝しています。そんな連中や、その手先や仲介人は、すべて、いかさま師に対するときのように扱いなさい。もしそのように扱わないなら、あなたも、いかさまの片棒を担ぐことになります。

1962年11月25日 Sathya Sai Speaks Vol.2 C51

http://www.sathyasai.or.jp/mikotoba/discourses/d_19621125.html より

サイ ババが誰それを通じて話をするなどという馬鹿げた理由をつけて、その人を誉めそやす人たちもいます！ 「この子にババが降りてきた、この人に降りてきた」と言って、ババが誰かに乗り移ったと人々に吹聴するのは、なんと愚かなのでしょうか！ 私は誰かに取り憑いてその人を通じて話す幽霊か悪魔だとも言うのですか？ そうしたものはすべて病んだ人々をだます芝居です。それらの餌食になってはなりません。私はこうした理由から、帰依心は内に秘め、管理して、心の曲がった人（詐欺師）や利己主義者たちに連れて行かれないようにしなさいと言うのです。そういった人たちは神の御業に関する間違った考えを吹き込んで、あなたに道を誤らせます。彼らは兄弟姉妹の神への信仰を汚してしまうのです。

1964年10月15日 Sathya Sai Speaks Vol.4 C35

『バジャン 神への讃歌』p179

私が誰かのところに「降りて来て」、その人を通して話をして、と言っている人たちがいます！ 彼らは、私の代弁者を装って、あたかも私が彼らを「公認」したかのよう、あるいは、あたかも私自身が彼らを通して話しているかのよう、人々に私の助言や私の提案を伝えています。これから言うことをよく聞きなさい。私は決して誰かを通して話をすることはありません。私は決して誰かに乗り移ったり、表現の媒体として誰かを使うことはありません。私は直接行きます。私はじかに行きます。私は私のまま行きます。

1965年3月27日 Sathya Sai Speaks Vol.5 C18

http://www.sathyasai.or.jp/mikotoba/discourses/d_19650327.html より

かなりの数の者たちが、私が“その人たちに”（！）降りて来ている、あるいは、それどころか、取り付いている、と宣言しています。彼らは身体を揺らしたり、動かしたり、震わせたりして、私が彼らを通じて話しているとか、彼らは私の支配下にあると主張して、さまざまなことを口走ります。彼らは、質問に答えたり、出来事を「予言」したり、さまざまなインチキをしたりして、私を知らない人や、私の実態を知らない人々からお金や物品を集めています。こうしたことはすべて、まったくのまやかしです。それは蔓延しつつある病気です。それらを奨励してはなりません。そうした病気に苦しんでいる

人を見たら、いつでもその芽を摘み取りなさい。そういう者たちには手先や仲介者たちがいます。まず、彼らの動きを阻止しなさい。そうすれば、彼らの操り人形たちも姿を消してしまいます。彼らは神聖さを装っていますが、その貪欲さが、彼らの卑劣さを物語っています。人々は「ババが夢で私のところに現れて、あなたにこれやあれをして、あなたからいくらいくらのお金を集めるように告げた」などと言います。そうした詐欺師の言うことを意に介してはなりません。彼らにふさわしい方法で処罰しなさい。それが私が皆さんに与える助言です。

1965年3月29日 Sathya Sai Speaks Vol.5 C20

私的那个人を通じて話をしているとか、質問に答えているという主張をしている人たちもいます。そのような人たちは、精神異常者か神経症を患っているかのどちらかです。あるいは悪霊にとり憑かされているか、もしくは、そうした方法でお金を儲けたいという貪欲にとり憑かれているかです。私に言えるのは、彼らを通して喋っているのは私ではないということだけです。私は霊媒を必要としませんし、代理人も、補佐役も、代弁者も必要としません。

1970年11月22日 Sathya Sai Speaks Vol.10 C35

http://www.sathyasai.or.jp/mikotoba/discourses/d_19701122.htmlより

私に代わって世話をするようにと、私からある地域をあてがわれたと宣伝している、いかさま師がいます。私の信者があまりにも増えたため、人の手を借りなければ私はその全員に注意を払うことができないというのが、彼らの言い分です！ 見るからに、これは馬鹿げた嘘ですが、さらに、別の側面についても考えてみなさい。純粹さと苦悩に満ちた切望を抱いて、「サイ、サイ、サイ」と泣き叫び、清らかで無私なる有徳の生活を送っている者でさえ、私を悟ることは難しいと感じています。そうであれば、サーダナも誠実さも、真理も謙虚さも知らない、先に述べたような低級で狡猾な卑しい人間が、どうやって私に祝福されているなどと主張することなどできますか？ 彼らは私と同じスタイルの服を着て、仕草や話し方を真似るかもしれませんが、それらはただ、彼らの嘘を際立たせるだけでしょう。私がそうした人に憑依しているとか、その人を通して話をするとか、その人に私の恩寵を注いでいるなどというのは、恥ずべき想定です！ どうして人はそんなことを信じることができるのか、私は不思議でなりません。

単純で誠実な者たちに損害を与えて、信仰心と帰依心を減少させようとする悪の力は、行動となって表出し、ずる賢い方法で注意を引こうとします。それらは靈性の道から求道者を離れさせ、金銭欲と悪意から成る世俗の道へ引き込もうとします。サイ シャクティ（サイの力）と、こうした低級なシャクティの間には大きな隔たりがあります。今、機会ができたので、そのことを言っておかなければなりません。サイ シャクティに限界はありません。邪魔も妨害も障害もありません。あなた方が信じようと信じまいと、サイ シャクティは、地を天に変え、天を地に変えることができます。ただ、そのような天変地異は必要ないだけです。こうした神の振る舞いは、低級なシャクティの、卑しく、これ見よがしな芸当とは懸け離れています。こちらは自然に生じる現れであり、あちらは客集めと無知な人たちを食い物にすることを計算したものです。低級なシャクティは、

服や仕草を模倣するかもしれません。というのも、模倣は防げないからです。しかし、あなた方はこう自問することができます。「羽が緑色の鳥はどれも鸚鵡おうむだろうか？ 花は這はう虫はすべて蝶いのししになれるのか？ 虎とらの皮を着た驢馬ろばは虎になれるのか？ 大きくなりすぎた猪いのししは象だといって誇れるのか？」と。服や話や芸当に騙だまされないよう気をつけなさい。また、それらに怒りを感じたり、嫌な気持ちになる必要もありません。というのは、真実はずっと真実だからです。どんな方策を講じても、嘘は決して真実にはなり得ません。こちらはまさしく真実の化身です。この化身を形作っているものに、不実や嘘は含まれていません。

1970年11月22日 Sathya Sai Speaks Vol.10 C35

http://www.sathyasai.or.jp/mikotoba/discourses/d_19701122.htmlより

また、別の所では、私がそこに来てランゴリーの粉〔家や寺院の入り口などに吉兆模様を描くのに使う彩色を施した米の粉〕などで字を書いて人々と交信する、などと公言しています！ 仮に私がどこかに行ったとしても、私はそのようなことはしません。あなたが私を見ることができるよう、私は直接行きます。私は第三者や霊媒を通して話したり答えたりはしません！

1971年5月14日 Sathya Sai Speaks Vol.11 C11

サイラムニュース138号より

このカリユガにも、ちょうどパウンドラカがヴァースデーヴァ〔クリシュナ神〕そっくりに変装したのと同じように、そうした偽者たちが現れています。今では、偽のサティヤ サイ ババたちさえいる始末です。彼らは私と同じ型のローブをあつらえ、髪を大きく膨らませ、写真で研究して私がしているのとそっくりに両手を上げ、私の真似をするために甚だしい努力をして、おかしい姿になっています。「模倣するのはただの人間、創造するのが神である」ということを彼らは忘れていました。そうした滑稽な方法でサティヤ サイ ババになろうと努力している者たちは、ただ、人々が神に置いている何らかの信仰を壊しているだけです。彼らは社会の平和と調和を害する不快な害虫です。彼らは自分の周りに自分と似たような虫たちを寄せ集めます。なぜならば、同じ羽を持つ鳥だけが群れることができるからです。こうした「なりすまし」たちは、猿の群れが自滅するとその群れが住んでいた森をも滅ぼすことになるという諺と同じように、自滅に陥って、自分が影響を及ぼしている社会にも破滅をもたらします。

1973年1月14日 Sathya Sai Speaks Vol.12 C2

http://www.sathyasai.or.jp/mikotoba/discourses/d_19730114.htmlより

バガヴァンは、決して誰にも寄付を求めることはありませんし、バガヴァンのメッセージを広めるためのエージェントも持っていません。私はこのような虚偽に満ちた人々とは何のつながりもありません。

2002年7月22日 『サイセヴァ』 p88

http://www.sathyasai.or.jp/mikotoba/discourses/d_20020722.htmlより